

論 文

子規の詠物詩について

何 美 娜

広島大学グローバルキャリアデザインセンター特別研究員

A Study of Masaoka Shiki's Eibutsushi

He Meina

Abstract : Eibutsushi is a very important style of Chinese classical poems. It has a long history and traditional writing style. Masaoka Shiki, who is famous as a great realist, proposed a realistic writing of things. Therefore, I'm wondering whether Shiki's Eibutsushi has the same realistic feature and his own emotions. With such questions, in this paper, I'll try to analyse Shiki's representative Eibutsushi works and, at the end, I'll also summarize their features and their writing techniques.

Key words : Masaoka Shiki, Eibutsushi, realistic style, emotion, analyse

はじめに

詠物詩は中国文学史において、長い歴史と伝統を持っている重要な形式であり、歴代の詩人たちは数多くの詠物詩を残している。日本では、江戸時代、安永、天明前後の京坂詩壇において、詠物詩が盛んに作られ、詠物詩のみを取り上げる詩集も多く出版された。明治時代に入ると、大沼沈山一派が熱心に詠物詩を作っていた。但し、詠物詩の定義については諸説あり、明確に定義されていない。本稿では、歳時を詠う作品や子規が遊覧しているときに作られた山、滝や地名を詩題にした作品については触れず、一つの対象物だけに焦点をあてた作品を子規の詠物詩の代表作として取り扱いたい（必要に応じ、一首の中で10種類の木を詠んでいる作品も取り上げる）。写実主義者として知られる子規は、目の前に存在しているものをそのまま言葉にすべきだと主張していた。漢詩という形式、特に対象物を詠む詠物詩における手法は子規がほかの文学形式で唱える写実説と類似したものなのだろうか。また、先学たちは子規の詠物詩の特徴について触れていないため、本稿では子規の

詠物詩を読解しながら、その特徴とそこに込められている子規の心情も明らかにする。なお、本稿では子規漢詩を引用する際、通行字体を用い、漢詩の通し番号については講談社版『子規全集』第八巻に従う。また、訓読にあたっては同書の内容を参考にし、現代かなづかいを用いた。

一. 子規詠物詩における写実

子規の詠物詩には個人的な感情を排し、対象物のみを描写するものが見られる。写実を主張する子規は詠物詩において、どのような詠み方をしているのだろうか。ここでは、子規の詠物詩における写実的な手法について具体的に考察を進めたい。

まず、子規の次の作品を取り上げる。

- | | | |
|-----|---------|--------------------|
| 107 | 菅公祠畔一高松 | 菅公の祠畔 一つの高松 |
| | 老幹不知経幾冬 | 老幹 知らず 幾冬をか経たる |
| | 仰見横柯寒籟浄 | 仰ぎ見る 横柯に 寒籟浄きを |
| | 俯知偃盖午蔭濃 | 俯して知る 偃盖に 午蔭濃やかなるを |
| | 蒼髯蓊鬱凌霜色 | 蒼髯 蓊鬱として 霜を凌ぐの色あり |
| | 鉄爪盤躡冒雪容 | 鉄爪 盤躡して 雪を冒すの容あり |
| | 地黒天昏風雨起 | 地黒く天昏くして 風雨起これば |
| | 疑聞半夜嘯虬龍 | 半夜 虬龍の嘯くを聞くかと疑う |

「咏小富士松次相原野水韻」 明治十五年

この詩の全体からは作者の個人的な感情は読み取れない。まず、松のある場所、「菅原道真公のやしろのほとり」と詠みはじめ、そして、「仰ぎみるには横に伸びた枝があり、寒々として風音が清しく、伏してみるにはその枝と葉っぱが屋根のように地を覆い、午後の陰がくっきりと濃い」と、松の枝について比喻を用いて描写する。そして、「青いひげのような葉はこんもりと茂っていて、霜を凌いだ色を湛え、鉄の爪のような枝は蟠りまがって雪を冒した姿を備えている。地が黒々と陰り、天が暗く雲り、風が吹き、雨が降り出すと、夜中に龍が吠えようとしているかと疑われる」と述べている。子規は松の枝を髯と爪に例え、松の有り様を鮮明に表している。また、松の一般的なイメージである長寿、寒を凌ぐという強い精神なども詠われている。最後、

眼前の景色から聴覚に入って、想像で龍を登場させている。中国の「虬枝」という言葉は、角が生えている龍のような枝を指す。それを以って松の枝を形容する詩句は多いが、松の全体を比喩するのは珍しい。詩の全体から子規の個人的な感情は読み取れないが、松に対する描写は正確である。そして、松の枝と葉を髭や爪に、松全体を龍に比喩するのは子規の巧妙な手法と言える。

このように対象物を客観的に描写し、作者自身の心情を排した作品として、以下の一首も取り上げられる。

- 109 直立三千丈 直立 三千丈
 堂堂不二山 堂堂たり 不二の山
 曾於画裡見 曾て 画裡に於いて見しも
 仙迹未得攀 仙迹 未だ攀じるを得ず
 一日過故人子明宅 一日 故人子明の宅に過り
 坐右時看富士石 坐右 時に富士石を看る
 此石出於富士川 此の石 富士川より出でて
 形如芙蓉独欹側 形 芙蓉の如くして 独り欹側す
 光彩絢異是天成 光彩絢異 是れ天成
 山脚碧兮山頂白 山脚碧にして 山頂白し
 恍疑四圍起雲煙 恍として疑う 四圍雲煙起こり
 卷舒繚繞幻無極 卷舒繚繞 幻 極まり無からんかと
 相見真個富士山 相い見る 真個の富士山
 对坐堪医烟霞癖 对坐すれば 医するに堪う 烟霞の癖
 誰言天下不二峰 誰か言う 天下不二の峰と
 今日別看玉芙蓉 今日別に看たり 玉芙蓉

「詠富士石」 明治十五年

この詩はまず、詠う対象である富士石ではなく、富士山のことから詠みだしている。「直ちに三千丈の高さに聳え立っているのは堂々として、世に二つと無い富士山である。かつて、絵の中で見たことがあるが、まだ神仙の遺跡があるその山に登ったことがない」と、四言絶句の形式で富士山について詠じている。ここで、不二の山をもって、その発音を富士山にかける用法から

子規のユーモアと技法が見られる。続いて、詩の雰囲気は一転して、「ある日、親友である武市子明の家に訪ね、座っている時、座席の右側にあるその富士石を見た」と、散文的な形式に変えて、富士石を見た場所などを紹介する。続いての四句は、また、詩的な形式に戻り、富士石について描写している。「この石は富士川から取れたものであって、富士山を思わせる形をして聳えている。その美しく非凡な光沢がまさに神の業であり、麓は濃い緑であって頂上は白い」と、富士石の外形について描写している。次に、その外形から「自分はうっとりで見入って、そのあたりに煙のような雲が立ち、巻いたり伸びたり、幻化極まりない様子を呈するかのよう感じた」と、富士石を見ている自分の感覚を詠っている。続いて、「本当の富士山を見たくなくて、富士山に向かって座っていれば、山間に隠居して山水に浸りたいという思いを満たすことができる。誰が富士山のことを天下無二の山であると言ったのか。今日ここに、また富士山とは別に玉のような美しい石が見られるのである」と、自分の思いを述べている。

この詩では富士石を詠むのはただ四句しかない。しかも、その四句の中でも、二句しか客観的な描写を行っていない。そのかわり、富士石から連想した富士山に対する描写が多い。詩形から見ると、七古の楽府であるが、初の四句の絶句の気分から第五句で散文的な世界に急転し、次の第六句・七句・八句と次第に散文的な感情より詩的感情に移り行く。そうしたところからは子規の巧みな作詩技法が窺える。また、客観的な描写だけではなく、富士石を見て、自分の想像した内容も述べられている。前詩の比喻と異なって、この詩で写実より目立つのは想像という手法であると言えよう。

続いて、このような作もある。

265	桃李飛紅已作塵	桃李 紅飛んで已に埃と作り
	春風半帯夏風来	春風半ば 夏風を帯びて来る
	扶疎新緑濃陰底	扶疎新緑 濃陰の底
	独有藤花恣意開	独り藤花有り 意を恣にして開く

「五月七日亀井池賞藤」其の一 明治十七年

この詩は亀井の池で藤の花を鑑賞した時に作られたものである。全詩はまづ藤の花ではなく、桃とスモモの花が朽ちて、土となってしまった状態を述

べ、半ば夏めいた春風が吹いてくると描写している。続いて、のび広がった枝葉の新緑の濃い影の下という藤の花が咲く場所を紹介している。この作は連作三首の中の第一首であるので、次の二首も含めて見てみたい。

- 020 紫綾紫裳華胄風 紫綾紫裳 華胄の風
 碧池如鏡影玲瓏 碧池 鏡の如く 影 玲瓏
 菅公祠畔好為伴 菅公祠の畔 伴と為るに好し
 建武忠臣万里翁 建武の忠臣 万里の翁
 「五月七日亀井池賞藤」其の二 明治十七年

この一首では、前二句はまず藤の花の姿について描写する。紫の花が貴族の着ている衣服のようで、また、その池に投影する様子は繊細で可愛らしいと述べている。後二句で「ふじ」という発音から連想を走らせ、藤の花を忠臣の万里小路藤房に喩えている。

- 266 藤花房軟任風吹 藤花の房 軟かにして風の吹くに任せ
 粉面芳心絶世姿 粉面芳心 絶世の姿
 匹似佳人倚亭北 匹し似たり 佳人の亭北に倚るに
 紫鈿落水影参差 紫鈿水に落ちて 影参差たり
 「五月七日亀井池賞藤」其の三 明治十七年

この一首に至ってようやく藤の花そのものについての描写が始まる。前二句は「花房は柔らかくて、吹く風に身を委ね、靡き揺れているが、美しく化粧し、清い心を持っている絶世の姿をしている」と藤の花の様子を詠っていて、それを絶世の美人に擬している。後二句はその比喻を具体的に展開させ、「その様子はまるで美人が部屋の北側に凭れて立ち、紫のかんざしが水に落ちて、水中に映される影がゆらゆらしているようである」と詠んでいる。

以上見てきた通り、子規は詩作の中では藤の花を忠臣や佳人などに擬す手法を用いて、対象物の特徴をよりいっそう鮮明に映し出し、内容をより豊富にさせている。続いて、次の一首を見てみよう。

- 37 藜筇尋到白蓮池 藜筇尋ね到る 白蓮の池
 解道高風君子姿 解道 高風君子の姿
 尤是清晨香世界 尤も是れ 清晨の香世界
 雨余東嶺日昇時 雨余 東嶺に日昇るの時

「看蓮花」 明治十四年

詩は宋の周敦頤の『愛蓮説』を意識に於いて作られたと考えられる。蓮は高尚な節操のある君子の姿を持っており、その香りも清らかな朝に漂っていると詠んでいる。子規は蓮の特徴や一般的なイメージをそのまま受け入れ、蓮を高潔な風格のある君子に擬人化させている。また、以下のような一首がある。

- 364 兵燹不能焚 兵燹も焚く能わず
 雨風不能碎 雨風も砕く能わず
 千年清浄身 千年清浄の身
 閱尽幾興廢 閱し尽す 幾興廢

「長谷村大仏像」 明治二十一年

この詩には仏像の形や様子などについての描写は見られない。子規は仏像から思いを馳せ、それに関連する歴史的事件を述べている。第一句は、この大仏が鑄造された後、元弘の変（1331～1333）、中先代の乱（1335）、永享の乱（1439）など、たびたび戦乱を浴びたことを踏まえている。第二句は応安二年の大風や、明応四年の津波によって、仏殿が破壊されて仏像が野外に置かれていたことなどを踏まえている。第四句は鎌倉を拠点にしていた源氏・北条氏などの興亡を指す。続いて、以下の作品を見てみよう。

- 522 一簾春雨暗窓紗 一簾の春雨 窓紗暗く
 歌罷香銷宿酒家 歌罷み香銷えて酒家に宿る
 東閣佳人夜深起 東閣の佳人 夜の深くして起き
 燭光微動海棠花 燭光 微かに動く海棠の花

「春雨」 明治二十七年

この詩はまず、「春雨がすだれのように降って窓掛けの薄絹も暗くなる」と、視覚から春雨を捉えている。二、三句は、人の行動について描写して、「歌声が止んで香の漂いも消えた後、酒楼に泊まった。東の部屋に住んでいる美人が夜中に起きる」と詠う。第四句ではまた情景描写に戻り、光が微かに海棠の花の上で動いているという躍動感に富んだ風景を繊細な目線で捉えている。同じく、「春雨」と題する有名な詩作は李商隱に見える。比較するため、ここで取り上げてみよう。

悵臥新春白袷衣、白門寥落意多違。紅樓隔雨相望冷、珠箔飄灯独自歸。遠路応悲春晩晩、残霄猶得夢依稀。玉璫鍼札何由達、万里雲羅一雁飛。
ちやうが (悵臥す はくこう 新春 白袷衣、白門 寥落 意多く違ふ。紅樓雨を隔てて相い望めば ひるがえ 冷やかに、珠箔灯に飄つて 独自に歸る。遠路応に悲しむべし春の晩夜たるを、えんぼん 残霄猶お得たり夢の依稀たるを。玉璫 鍼札 何に由りてか達せん、万里の雲羅 一雁飛ぶ。)

李商隱のこの詩は恋愛詩で、濛々たる春雨を借りて、遠方にいる恋人を思う内容である。春雨という自然現象によって、思念の愁が一層引き立てられている。子規の「春雨」もまず、春雨に即して詠い、二、三、四句はなんらかの原因で夜深く眠れずにいる独りの佳人の思いに転じて詠っている。しとしと降る春雨から、一人の女性の思いに繋がる発想は李商隱の詩と共通していると言えよう。

以上の分析によって、対象物を自分の感情を交えずに描写する子規の詠物詩に、対象物をそのまま客観的に描写するものが意外に少ないことが分かる。こうした詩では、子規自身の個人的感情を入れなくても、比喩、擬人、想像、連想などの手法により、対象物をより鮮明に映し出している。また、詠物詩の中に歴史的な事件も取り入れて、詠史的な描写も取り入れることも子規の詠物詩のひとつの特徴であると言える。

二. 子規詠物詩における物と情

中国では、「詠物詩、齊梁始多有之……至盛唐以後、始有即物達情之作」¹ (詠物詩は、齊梁始めて多く之れ有り、……盛唐に至りて以後、始めて即物達情の作有り) という指摘がある。子規は詠物詩においていかに物とともに情

を詠んでいるのか。その疑問について、漢詩作品からいくつかの例を取り上げ、子規の詠物詩における物と情を考察したい。まず、子規の次の一首を見てみよう。

6 帶露千莖葉 露を帯ぶ 千莖の葉
 含風數個花 風を含む 數個の花
 看來無俗態 看来 俗態無し
 与汝了生涯 汝とともに生涯を了えん

「詠秋蘭」 明治十一年

一、二句は露を帯びている蘭の葉っぱと風に靡く幾輪の花を詠むものである。それを受けて、第三句は蘭のそのような姿が俗から離れているという自分の考えを綴っている。さらに、第四句は脱俗している蘭とともに生涯を送りたいという詩人の感情と理想を述べている。この詩は蘭の姿に即して詠うところから始め、三句と四句は蘭の姿に魅了され、蘭とともに生きていきたいという作者の個人的感情も取り入れている。蘭は中国では「花の君子」と呼ばれ、文人墨客に好かれる詩材である。ここで、同じ詠物詩であって、秋蘭を詠う詩として、朱熹の「蘭」を挙げよう。

漫種秋蘭四五莖、疏簾底事太関情。可能不作涼風計、護得幽香到晚清。

(漫ろにして 四五莖の秋蘭を種え、疏簾の底事 太く 情に関かる。能う可き涼風の計を作らず、幽香 晩清に到りを護るを得。)

朱熹のこの詩は単純に蘭を詠い、従来の蘭のイメージである君子賢才の比喩も含まれているが、自分の感情は綴られていない。この点において、子規の「詠秋蘭」とは異なっている。この詩は子規の明治十一年の作である。「花は我が世界にして草花は我が命なり。幼き時より今に至る迄野辺の草花に伴ひたる一種の快感は時として吾を神ならしめんとする事あり」²と明治三十一年、子規自身が回想しているとおりに、子規は人間より自然を愛していた。この詩は「与汝了生涯」を通して、文学における写実という道を選んで生涯を終えた運命をまだ十二歳の子規がすでに予知していたような一作である。

次の詩もまた、対象物とともに作者の情を詠っているものである。

- 92 艷艶凝濃粧 艷艶 濃粧を凝らし
 紛紛放異香 紛紛 異香を放つ
 杏桃不爭美 杏桃 美を争わず
 春晚占花王 春晚 花王を占む

「題牡丹贈安倍国手」 明治十五年

これは牡丹を詠んでいる贈詩である。まず、牡丹の様態から詠い始め、「色鮮やかで衆多にして盛んな牡丹は他と異なるよい匂いを放っている」と述べている。続いて、「他の花は敵わず、牡丹が花の王者の地位を占めている」と述べている。ここでは、子規は王者である牡丹を持って、贈る相手である安倍国手³の高い技術を賞賛していると考えられる。次に、次の一首を見てみよう。

- 193 寒江晩宿蘆花裡 寒江 晩に宿す 蘆花の裡
 何事半宵更驚起 何事か 半宵 更 驚起す
 嘹唳哀鳴不耐秋 嘹唳たる哀鳴 秋に耐えず
 高楼明月有遊子 高楼明月 遊子有り

「雁」 明治十六年

第一句は寒々とした川辺の蘆花の中で寝ている雁を描写し、第二句は夜中、なんらかの原因で驚いて飛び起きた雁の様子を詠っている。続いて、第三句では雁の甲高く、悲しい鳴き声が蕭々たる秋という季節と合わさることによって、より悲哀の感を漂わせている。第四句はそのような情景に触発され、高い建物に立って、月を仰ぎ見ながら、故郷を離れている作者の孤独感、悲哀感を表現している。「雁」もまた詩人たちに好んで使用されている詩材の一つである。よく、「帰雁」という主題をもって、望郷の感情を表現する。この詩が作られた明治十六年は、ちょうど少年子規が故郷の松山から離れ、一人で上京する年である。子規はこの詩の中で、群れからはぐれた孤独な雁に自分自身を重ねて、望郷の情を表わしている。また、「帰雁」だけではなく、「孤雁」という形象も重ねて読み取れる。「孤雁」という詩語も中国古詩の中でよく出てくる。有名なのは杜甫の「孤雁」という詠物詩である。子規のこの詩は「孤雁」と「遊子」、つまり、孤独と思郷、両方のイメージを持っている。

さらに、詠物詩における物と情との関わりを考えるにあたって、もう一つ無視できないものがある。それは、自己仮託である。これは対象物を賛美することで、そこに自らの理想とする姿を託すというものである。子規の詠物詩にも自らの理想とする姿を対象物に重ね合わせるものがある。

- 149 白梅尤瘦硬 白梅 尤も瘦硬
 只合在仙家 只 仙家に在るべし
 休向人間媚 人間に向かいて 媚ぶるを休めよ
 本非富貴花 本富貴の花にあらず

「白梅」 明治十六年

この詩はまず、白梅の極めて細く硬い感じという性質を詠い、そのような性質はただ仙人の家にあるべきものであると作者の考えを述べる。続いて、「白梅が利益のために、世間に媚びる必要はなく、本来富貴の感じの花ではない」という内容である。梅を詠う詩は中日両国で大量の作があるが、白梅を詠う作は少ない。中国では梅は「蘭」、「竹」、「菊」と合わせて、「花の四君子」と呼ばれている。梅は冬の寒さを凌いで花が咲くことから、人の俗流に流されず、高い気節の象徴として用いられている。この作では、子規はさらに純朴と高潔を象徴する「白」をつけて、梅のそうした精神を一層高めている。ここには白梅に子規の自らを寓する意があると考えられる。松山市の没落した士族の家庭に生まれた子規は富貴な生活と無縁であった。しかし、外祖父、松山藩儒であった大原観山の影響で子規は士族としてのプライドを持っていた。白梅への「休向人間媚、本非富貴花」（人間に向かいて 媚ぶるを休めよ、本富貴の花にあらず）という戒めも同時に自分への呼びかけと考えてよいだろう。このように、詠われる対象物に自己の姿を重ねた作品はまた、以下のようなものがある。

- 244 鉄檻終年無限情 鉄檻 終年 限り無きの情
 凌雲之志未輕傾 凌雲の志 未だ輕傾せず
 忽聴群鳥空間噪 忽ち群鳥 空間に噪ぐを聴き
 睥目仰天号一声 睥目して天を仰ぎ 号ぶこと一声

「題上野動物園観鷺有感」 明治十七年

この一首はまず、自然界から離れ、一年中動物園の鉄の檻に束縛されている鷺の限りない思いを抱く姿を詠っている。続いて、そのような自由もない境地に立たされても、「雲を凌いで高く飛ぼうとする志は、まだ昔とは変わらない」と詠っている。次の二句は「鳥たちの空に騒ぎ立てるのを聞くやないか、目をむき、天を仰いで一声叫んだ」と述べている。この詩を作った明治十七年は子規が大志を持って、東京に出て二年目である。この年の三月、子規は久松家の育英事業である常盤会給費生に選ばれ、月額7円（大学に入ってから10円）を支給されるが、金銭面ではかなり厳しい状況にあった。自由に振る舞えない境地はまるで、この囚われている鷺が臨む境地と同じである。しかし、窮境にあっても、志を失わず、いつも空を高く飛ぼうとする鷺の姿に子規は共鳴したのであろう。この詩は鷺の囚われている姿だけでなく、その精神性にも着目している。「凌雲之志未軽傾」という一句はまさしく子規自らの理想を詠ったものとみてよからう。

続いて、自己仮託がもっとも分かりやすい一作がある。それは以下の詩である。

- | | |
|-------------|------------------|
| 423 偏従新緑暗辺鳴 | 偏に 新緑の暗き辺より鳴き |
| 花落香消惱客情 | 花落ち 香消えて 客情を悩ます |
| 万古訴冤蜀天子 | 万古 冤を訴う 蜀の天子 |
| 十年卜乱宋儒生 | 十年 乱を卜す 宋の儒生 |
| 青楼悲别人無影 | 青楼 別れを悲しんで 人に影無く |
| 翠帳催婦月有声 | 翠帳 婦を催して 月に声有り |
| 薄倖更憐窮措大 | 薄倖 更に憐れむ 窮措大 |
| 枕頭咽血泣三更 | 枕頭 血を咽んで 三更に泣く |

「子規」 明治二十三年

まず、詩題の「子規」というのはホトトギスのことである。子規は明治二十一年八月、鎌倉で初めて咯血した。また、明治二十二年五月九日の夜、突然咯血して、時鳥（ホトトギス）の句を四、五十句作り、初めて子規と号す。咯血時の記録として「子規子」⁴に「子規子（筆名（号）、子規子（書名、文名）ヲ著ハス、啼血始末、血の綾、読書弁ノ三篇二分ツ」とある。また、咯血し号を立ててから思いついて編纂したものに「八千八声」⁵があるが、こ

れは和漢の文学・記録からホトトギスに関する記載を書き抜いたものであり、全部で377ページにわたる驚くほどの分量を持っている。したがって、この作の中で詠われている「子規」は作者自身とも捉えられる。つまり、子規は詩中の「子規」に自らの情を託して詠んでいるのである。

まず、「ホトトギスはもっぱら新緑の暗がりの中で鳴いている。花が散り落ち、その香りも消えてしまったという景色は、旅人の心を悩ませる」と、鳥である子規について詠っている。転じて、「蜀の天子は冤罪を永久に訴え続け、十年も先の世の乱れを宋代の儒者は悟っていた」とホトトギスに関する典故を並べている。五・六句はまた情景描写に移り、「高殿で悲しくお別れをして、その人の姿が見えなくなった。緑のとばりの内にあつて聞けば、月光の下にホトトギスの声がする」と詠んでいる。「催帰」というのは、ホトトギスの別名である「不如帰」（帰るに如ず）からの発想である。「帰れ帰れ」と促すことで、「不如帰」と同じ意味となる。そして、最後の二句はまさに子規自身の描写である。「幸せに恵まれていない貧乏書生はさらに哀れに思われ、寝ようとしても咯血に噎せて眠れず、夜半に泣くのである」という内容である。「窮措大」は貧書生のことを指す。この年の七月、子規は第一高等学校本科を卒業し、九月、東京帝国大学文科大学哲学科に入学した。学業がまだ様になっていないことに加え、咯血という黒い影が子規を覆っている。ここでは、子規という鳥を詠うと同時に、また、自分自身のことも詠っている。この一首は典型的な自己仮託を用いた詠物詩であると言えよう。

ところで、子規の詠物詩に目を引く日本刀を詠う作品もある。

- | | | |
|-----|------------|---------------------|
| 289 | 日本之刀三尺長 | 日本の刀 三尺の長 |
| | 鋒鋦六月凝秋霜 | 鋒鋦 六月に秋霜を凝らす |
| | 精気衝天天欲紫 | 精気 天を衝き 天 紫ならんと欲し |
| | 干将莫耶匿無光 | 干将莫耶も 匿れて光無し |
| | 日本男児胆如斗 | 日本男児 胆 斗の如く |
| | 一時傾倒百壺酒 | 一時に傾倒す 百壺の酒 |
| | 隻手把刀劈軋坤 | 隻手 刀を把りて 軋坤を劈けば |
| | 光芒閃処無敵手 | 光芒閃く処 敵手無し |
| | 君不見神功征韓所慮深 | 君見ずや 神功 韓を征して 慮る所深く |
| | 一劍之下王就擒 | 一劍の下 王も擒に就きしを |

又不見太閤提劍匹夫起　又見ずや　太閤　劍を提げて匹夫より起こり
 十万貔貅伐鷄林　十万の貔貅　鷄林を伐ちしを
 聞説今日砲礮遍海外　聞説　今日砲礮　海外に遍しと
 砲礮何恐討可退　砲礮何ぞ恐れん　討って退くべし
 日本之刀猶可摧　日本の刀　猶摧くべきも
 日本男児之胆不可碎　日本男児の胆　砕くべからず

「日本刀歌」 明治十八年

この詩の初四句は日本刀について、「日本の刀は三尺の長さで、六月にもそのきっさきが秋の霜が凝るように寒々としている。刀の精気が鋭く天を衝くのを感じて、天は紫になろうとし、名劍の干将・莫耶も隠れて光を失う」と詠っている。次に、日本男児が刀を以て天地を切り開く様を描いている。そして、「君は知らないのか、昔神功皇后の三韓征伐は考慮することが深く、一劍の下で敵の王を擒にしたことを。また知らないのか、太閤秀吉は劍を提げて平民より身を起こしたが、その後、十万の精銳部下を率いて朝鮮を討伐した」と歴史を詠んでいる。最後、「今日になって、外国では大砲などの武器があまねく存在しているが、それに対する何の恐れもないため、撃退できるのである。日本の刀は砕かれるにしても、日本男児の勇氣は砕けることがない」と述べている。全詩では「日本刀」を題にしているが、歴史人物を取り上げ、自分の思いおよび日本男児の氣概に重点を置いて詠んでおり、そこに込められている子規の愛国心が窺える。また、子規の日本刀を詠う詠物詩には以下のような作もある。

290 日本刀鋒鋭絶倫　日本刀の鋒　鋭きこと絶倫
 紛紛魑魅尽逡巡　紛紛たる魑魅　尽く逡巡す
 請看国宝叢雲劍　請う看よ　国宝叢雲の劍
 億万斯年護帝宸　億万斯年　帝宸を護る

「詠日本刀」 明治十八年

これもまた、日本刀の切っ先の鋭さを強調している。「叢雲劍」は三種神器の一つである草薙劍の前称であり、素戔鳴尊が八岐大蛇を斬った時、尾から出たと伝えられている。この作品は国を守る日本刀のめでたさを詠んでいる。

日本刀は中国でも一時、詩文創作の題材の一つとなっていた。北宋時代に日本刀はその鋭さと美しさから「宝刀」と称えられていた。宋代以降、元代を経て明代に至るまで、日本刀は中国に大量に流入した。歐陽脩の「日本刀歌」と梅堯臣の「錢君倚学士日本刀」に始まり、歴代の文人が日本刀を詠んだ作品も多い。

以上、子規の漢詩作品を取りあげて、詠物詩における物と情との関わりについて論じてきた。子規は対象物が持っている性質に対して、正確な把握のもと、それに沿って描写しながら、自分自身と重ね、自然に情を綴った。子規は詠物詩の中で自分の高い理想や愛国心を詠んだり、物の性質と重ねて、自分の高潔な気質を託したり、または自分の哀れさと孤独を嘆いたりしている。特に、「子規」という詩作の中では、子規という鳥の描写に極自然に自分自身を仮託して詠んでいる。対象物を精緻に描写するとともに、子規は自分の情をいかに取り入れるのかということに力を尽くしてきたと言える。

三. 子規詠物詩における機知

前の二節では、詠物詩の二種類、情を入れずに対象物を詠う作品と対象物に作者の感情を込めて詠う作品について論じてきた。そのほか、子規の詠物詩には子規の機知もところどころ見られる。それも子規詠物詩のひとつの特徴として具体的に見ていきたい。まず、子規には、次のような作品がある。

7 風裡縦横上碧空	風裡縦横 碧空に上る
多年苦慮奪天工	多年の苦慮 天工を奪う
不須鶴背仙人術	須いず鶴背仙人の術
千水万山指点中	千水万山 指点の中

「風船」 明治十一年

この詩の詩題は風船である。ゴム風船は明治一年横浜で中国商人が最初に売り出した。明治九年から子供の玩具として売り出されるようになった。ひとつの可能性として、子規は擬人化されたゴム風船の視点から詠んでいると考えられる。また、明治十年に島津源蔵が京都の仙洞御所（仙洞とは仙人の住むところを意味する）で日本初の有人気球の飛行試験に成功した。こうした歴史的事実と詩に用いられている「仙人」という詩語を踏まえれば、気球

に乗っている人の視点から詠んでいる可能性も考えられる。いずれにしても、まず風船というものに着目し、それを題材にしているのが新鮮である。さらに、風船が自在に大空を飛んでいることに即して仙人の術まで連想するのは機知に富んだ表現であると言えよう。

子規の詠物詩には、この詩のように対象となる物の形状や性質あるいは関係する故事などを利用することで、単に物を描写するだけでは得られない新しいイメージや発想を詠うものが多い。以下においても新鮮なイメージや発想を詠うことに重点を置いた作品を続けて取り上げたい。

- | | | | |
|-----|---------|----------------|----------------|
| 246 | 竹筧無声甚寂寥 | 竹筧声無く | 甚だ寂寥 |
| | 檐端垂柱綴瓊瑤 | 檐端の垂柱 | 瓊瑤を綴る |
| | 風吹江上波何静 | 風 | 江上に吹いて 波何ぞ静かなる |
| | 月印池心影不揺 | 月 | 池心に印して 影揺れず |
| | 孝母王生寒獲鯉 | 母に孝に | 王生は寒に鯉を獲 |
| | 濟軍漢帝夜連鑣 | 軍を濟い | 漢帝は夜に 鑣を連ねたり |
| | 午天猶是冬陽嫩 | 午天猶是れ | 冬陽嫩く |
| | 未許浮萍自在漂 | 未だ浮萍の自在に漂うを許さず | |

「氷」 明治十七年

前四句は「竹の筧は音もなくごく物寂しくて、軒端に垂れている氷柱はまるで美しい玉を綴ったようである。風は川の上を吹いているのに、なぜか波が立っていない。月は池の真ん中にくっきりと映されているのに、なぜかちっとも揺れていない」と詠じて、聴覚と視覚から得られた氷によって周辺のものに与えた変化を描写している。氷が張っているのに、風に吹かれても波に成れず、月の投影も一動きもできなくなっている。この四句は直接に「氷」の形などについての描写ではなく、周りの情景によって詩題の氷を詠じている。このような書き方は子規の漢詩における工夫であり、また面白さでもあると言えよう。続いて、中国の晋の王祥⁶と東漢の將軍・王覇⁷に関する典故を用いて、詩の内容をより豊富にさせている。最後の二句は再び情景描写に戻り、「冬の日差しは真昼でも弱く、まだ水草を自在に漂わせていない」と、視覚から得られた景色を呈示している。

「氷」は詩材の一つとしてよく使用されているが、詠物詩の詩題とされるのは珍しい。前述した「風船」と同じく、詠物詩の対象物への選択からも子規の独特な感覚が窺える。内容的には氷から様々な方向に考えが飛んでおり、視覚、聴覚、典故などをもって、豊かで多彩な詩作を生み出していると言えよう。氷自体についてすこしも触れていないが、回りの風景描写により、氷の特質がより鮮明に表現されている。子規のこうした発想は明太祖の「鶏卵」を想起させる。

一塊無瑕玉、中含混沌形。忽然成五徳、叫落満天星。
(一塊無瑕の玉、中に含む混沌の形。忽然五徳を成し、叫び落す満天の星。)

この詩では前二句は卵を、後二句は孵った鶏を詠じたのであるが、鶏卵の事を説破していない。全詩は詩題の卵について側面からの描写に徹している。全詩が一題の謎とも見なされる点においては子規の詩とも共通している。

子規の「氷」という作は風景や典故などをもって、縦横に側写して、その表現上の工夫には見るべきものがあり、機知に富む作品と言えよう。また、氷に関連する典故の並びから、十八歳の子規がどれほど博識なのかも知られる一作である。

また、このような詠物詩も見られる。

376	繞樓群樹在	樓を繞りて 群樹在り
	銀杏及砂榆	銀杏と砂榆と
	杉老一千歳	杉は老ゆ 一千歳
	桜栽五百株	桜は栽う 五百株
	蒼椎依皂莢	蒼椎 皂莢に依り
	翠柏接青梧	翠柏 青梧に接す
	樅動声吹籟	樅動いて 声 籟を吹き
	梅肥子貫珠	梅肥えて 子 珠を貫く

「詠月香樓外樹木」 明治二十一年

この詩の八句の中では銀杏、砂榆、杉、桜、椎、皂莢、柏、梧、樅と梅、ともに10種類の樹木が読まれ、詠物詩としては珍しい構成を持っている。内

容的にはそれぞれの木について、一言で述べ終わる、あるいは名称だけを並べる形を取っている。こうした構成は伝統の詠物詩から逸していると見えるが、子規は詩題の「樹木」をもって、それら全部を巧みにまとめて一つの詠物詩にしている。

続いて、子規のこの漢詩を見てみよう。

64 数枝黄菊半離披 数枝の黄菊 半ば離披せり
 誰愛風流隱逸姿 誰か愛す 風流隱逸の姿
 陶令登仙経幾歳 陶令登仙して 幾歳をか経たる
 空嘗霜苦護頽籬 空しく霜苦を嘗めて 頽籬を護る

「賞菊」 明治十四年

賞菊の賞は鑑賞の意もあるが、節操を讃える意もある。この詩は両方の意味を踏まえている。まず、「数本の黄色い菊が半分咲いている」と菊の描写から詠い、続いて、「一体誰がこの菊の風流で隠逸的な姿を愛するのであろうか。陶淵明がこの世を去ってから何年も経ったが、それ以降、菊を深く愛する者がおらず、菊は虚しく霜に打たれる苦しみを嘗めつつ、崩れたまがきを守っているのである」と詠んでいる。従来、詩人たちは菊を取り上げ、隠居しようとする心境を表している。しかし、子規はここで、陶淵明が死んだあと、隠逸のイメージを持つ菊を愛する人がいないと詠み、空しく苦しんでいる菊の姿を提示している。つまり、従来、俗世を離れ、風流な姿を賞賛する使い方と異なり、子規は人を驚かせるような真逆な発想で菊を詠じている。

以上、考察してきたとおり、10種類の樹木をひとつの五言律詩にまとめている異色の詠物詩を含む子規の詠物詩には斬新さと機知に溢れている。そこからは子規その人の性格も覗うことができる。つまり、ユーモラスで創造的な精神を持つ子規という人物を子規の詠物詩からも窺うことができるのである。

終わりに

以上、子規の詠物詩について見てきた。本稿での分類は絶対的なものではなく、子規の詠物詩の特徴を示すための便宜的な手段でしかない。子規の対象となる物を写すことの正確さは評価されるべきであるが、子規の詠物詩の

多くは単に対象物を精緻に描写するのではなく、そこに作者自身の情を直接的に、あるいは、間接的に表現することも多い。つまり、子規の詠物詩は写実的な特徴を持っているだけでなく、抒情性に溢れ、斬新さと機知にも溢れている。また、詠物詩の中では写実だけでなく、その情景から想像を膨らませ、関連する歴史的イベントも詠じている。こうした点から見ると、子規は漢詩では写実を重視しながら、想像、擬人、比喩などさまざまな手法を用いた事が分かる。また、子規は詠物詩の中では普段言えない自らの志や悲しみなども対象物に託し、ユーモラスや創造的な発想をもって詠じ、漢詩創作に励んでいたに違いない。今回はおもに子規の詠物詩の特徴について考察したが、子規の詠物詩と中国の詠物詩との関連などについては次稿にゆずりたい。

注

¹ 王夫之 『姜斎詩話』（人民文学出版社 1961年6月）

² 「吾幼時の美観」『子規全集』（講談社 1902年）第12巻所収（p 258）

³ 「国手」は名医の称。明治十二年の夏、子規が擬似コレラにかかったとき、治療にあたったのが安部義任医師である。

⁴ 「少年時代創作篇」二 『子規全集』（講談社 1902年）第12巻所収

⁵ 「編著・補遺」『子規全集』（講談社 1902年）第12巻所収

⁶ 『晋書・王祥伝』に「母嘗欲生魚。時天寒冰凍。祥解衣、將培氷求之。氷忽自解、双鯉躍出。持之而歸。」（母嘗て生魚を欲す。時に天寒にして氷凍る。祥衣を解きて將に氷を剖きて之を求めんとす。氷忽ち自ら解け、双鯉躍り出ず。之を持して歸る。）とある。

⁷ 『後漢書・王覇列伝』に「氷合滹沱」という記載があり、東漢の將軍・王覇が漢帝・劉秀の軍隊を率い、氷の張っている滹沱川を無事に渡ったという物語がある。